edited by dr. masato mugitani
vol.5-no.2

ポケット・ナイトメアの研究

麦谷眞里

(まえがき)私が Max Maven の"Pocket Nightmare"を初めて観たのは、彼の"KAYFABE"というDVD です(写真713)。

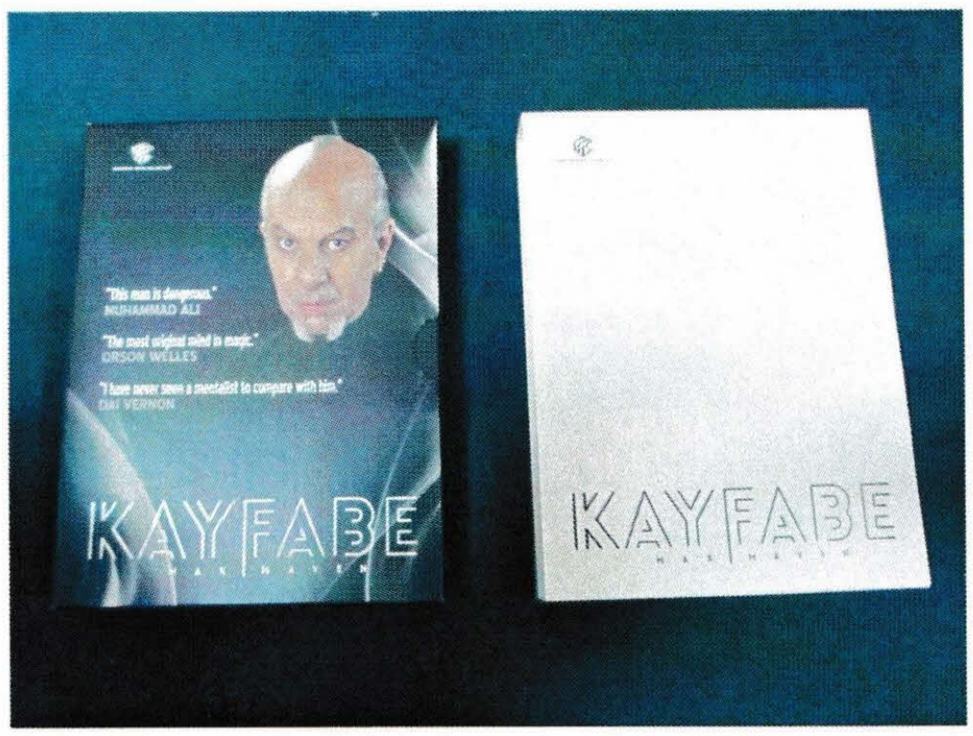


写真713

私は、Max Maven の手品は大体ひっかかるのですが、実は、これはあまり驚きませんでした。実演を観て最初に思ったのは、スベンガリー・デックでフォースしたのではないかということです。でも、ただちに、途中で客にデックを渡して自分のカードを探させたから、スベンガリーではないな、と思いました。しかし、この見せ方で、最後にマジシャンのポケットから客の選んだカードが出

てくるのはまちがいなくフォースか、カード・インデックスによる対応です。カード・インデックスも、何も52枚対応する必要はないわけで、その選択範囲を狭めておけば十分に対応できる優れたギミックです。準備した範囲であれば、客が任意に選んだカードを取り出せることが利点です。難点は客がカードの名前を言うまでは行動を起こせないことで、これはカード・インデックスの宿命とも言えます。この手品の Max Maven は最初にデックをシャッフルさせることもなく、いきなりピークで客にカードを選ばせたわけですから、100%フォースと言えます。フォースなのに、客がピークして選んで覚えたカードがデックの中にないというのはどういう事態でしょうか？まずここで2つの事実があります。ひとつめは、客がカードをピークして覚えたという事実と、ふたつめは、実際に客がデックを手にして表向きで探したのにデックの中に客のカードがない、という事実です。デックではなくて、数枚の絵札で演じる「プリンセス・カード」という手品があります。絵札ではなくて、スポット・カードばかりで演じるバージョンもあります。5，6枚のカードの表を見せて、その中から客が1枚のカードを心の中で覚えます。マジシャンが、パケットを一度そろえ、あなたの覚えたカードだけがなくなります、と言ってから再び表を見せると、確かに客のカードだけが消えています。タネはディバイディッド・カードと呼ばれる、上下のインデックスの異なるカードを使っていることです。客が拡げたどのカードを覚えても、上下逆さにして拡げれば、さきほどのカードはすべて消えてしまっています。つまり、そのインデックスがないのです。これが、ついさきほど、客の覚えたカードがなくなっている原理です。この種のカードを使う手品はけっこう多くて、Max Maven 自身にも“B'Wave”という単売商品があります。これを最大限に進化させたものが、Gordon Bean と Larry Jennings の“The New Limited Edition”です。この方式を使えば、デック全体がディバイディッド・カードになっていて、反対側のインデックスがすべてフォースするカードになっていれば可能です。客がピークして覚えるときはフォース側のインデックスを見ていて、点検するときは、反対側のインデックスを見ているのです。私のその考えはほぼ正解でした。「ほぼ」と書いたのには理由があります。このデックは52枚すべてがディバイディッド・カードになっているのではなくて、客がピークする可能性のある中央付近の35枚程度だけがそのようになっていれば十分だったからです（写真714）。

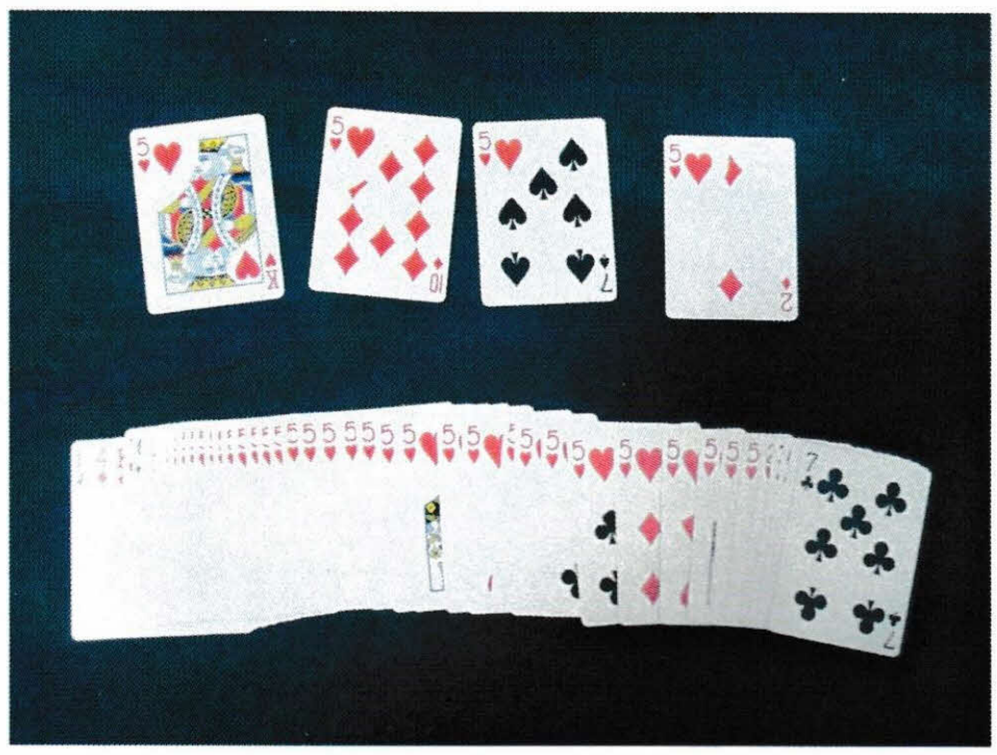


写真714

前置きが長くなりました。Max Maven はこの手品を考案するにあたって2人のマジシャンの作品を参考にした、と DVD で述べています。具体的には、Teodore Annemann と Ken Krenzel です。DVD にはその出典が述べられているだけで、どのような手品であったかは解説されていません。そこで、新しい手品はどこからヒントを得てどのような経緯を辿って開発されるのかを示すためにも、この二人のマジシャンのそれぞれの原典をまず紹介してみます。

1. Annemann's Nightmare

原典と書きましたが、Max Maven が DVD の中で紹介していたのは、"The Life and Times of a Legend : Annemann"という本に収載されている"The Nightmare"という小品で、私はこの原稿を書くためにこの分厚い本を書棚で探しました。かなり大部なオレンジ色と黒色の本ですからすぐに見つかると思ったのに、どこを探してもありません。しかも、私はこの本、ご丁寧にも2冊持っているはずなのです。なのに、かなり隈なく書棚を探したのにありません。大きくて重い本なので、書棚の最下段に収められていると思って、見える空間に置いてあるすべての書棚の最下段を探したのですが、2冊はおろか1冊すら見つかりませんでした。私はお世辞にも整理がいいほうではありませんので、このようなことはよくあります。本の量が多いために、当然ですが、書棚に収まっていない本も多く、あまり使わない本は、場合によってはウォーキング・クローゼットの奥の棚に入れてあったりします。もう探すのをあきらめて、この本をもう1冊買うことにしようと思い、アメリカの奇術材料店に問い合わせましたが、かなり以前に出た本なので在庫がありません。そこで、シカゴのオークション会社に連絡したら、2冊ありました。ただし、1冊230ドル(約2万5千円)もします。航空便で送ってもらったら優に3万円は超えます。価格はしょうがないとしても、すでに2冊も持っている本をさらに購入するという行為に抵抗がありました。徹底的に探すこともできますが、それは体力と精神を消耗します。考えました。

前述の"The Life and Times of a Legend : Annemann"という本は、Max Abram という人が、これまでに刊行されたアンネマンの著作や未刊行の原稿なども含めて集大成したものです。アンネマンは著書が多いですから、もし、特定の本であれば、Max Maven がその著書の名前を参照したはずです。それをしなかったということは、個別の著書ではなくて奇術雑誌などに発表された作品である可能性があります。それなら、もっとも可能性が高いのは、アンネマン自身が編集・発行していた"JINX"です。"JINX"なら私はすべてのバックナンバーを持っていますから調べました。すると、1935年3月の第6号に、"THE NEW NIGHTMARE EFFECT"と題する作品の解説がありました(写真728)。この解説の冒頭に、「これは6年前に発表した"The Nightmare"の別バージョンだ」と書いてあります。したがって、Max Maven が取り上げたのは、6年まえのバージョンだったかもしれませんが、頭に"NEW"と添えてある以上、通常はこちらのほうが改良してあると思うのが自然です。そこで、今回はこれを解説します。最初に言ってしまいますが、これ、いまから85年も前のカード・マジックですが、なかなかいい手品です。アンネマンの最初のバージョンのほうは、本を見つけたときに改めて取り上げることにします。

なお、以下の解説は、単に"JINX"からの翻訳ではありません。私(麦谷)が演じやすいように

相当にアレンジしてあります。アンネマンの原案の基本的な骨格とコンセプトなどは踏襲してありますが、細部の動きややり方などはアレンジしてあります。また、なぜそのようにアレンジしたのかは[コメント]欄で後述します。

[現象]

マジシャンは一人の客からデックを借り、それを借りた客にシャッフルさせます。次に、適当な1枚を抜きだして、そのカードの表に予言を書きます。予言は、誰の目にも触れないようにして別の客のポケットに入れておきます。次に、デックを借りた客に、デックの中から任意に1枚のカードを選んで覚えさせます。予言を開ける前にデックを借りた客に覚えたカードの名前を言ってもらい、次いで予言を渡した客に、カードに書いてある予言を大きな声で読み上げてもらいます。まさしく客の選んだカードが予言されていました。しかし、これで終わりではありません。客の目の前で、デックを1枚ずつ表向きに点検して行くと、なんと確かに覚えた客のカードがありません。それもそのはず、それは予言が書かれた、もう一人の客が最初から持っているカードだったのです。二重の驚きです。

[準備]

準備が必要です。観客(手品のマニアを想定)がもっとも持っていそうなデックのカードで作りますが、ここでは、タリーホーの青裏にしてあります。客に選ばせるカードを仮に「クラブの3」にします。アンネマンの現案の例もクラブの3です。次に、ほんのちょっと短端をショート・カードにした赤の絵札を1枚用意します。この赤の絵札のショートにしなかった側の短端の裏側とクラブの3の短端の表側とを糊で貼り付けますが、貼り付けるのは下3分の1か4分の1くらいで十分です。上側3分の2や4分の3は自由にしておきます(写真715)。また、絵札の短端の一方をショートにカットする幅はほんの少しでいいのですがカッター等で目盛りがあれば0.5mm程度でかまいません。赤い絵札にしたのは、マジシャンがデックの中から探しやすいからで、それ以外に別に赤い絵札である必然性はありません。このカードをギミック・カードと呼ぶことにします。

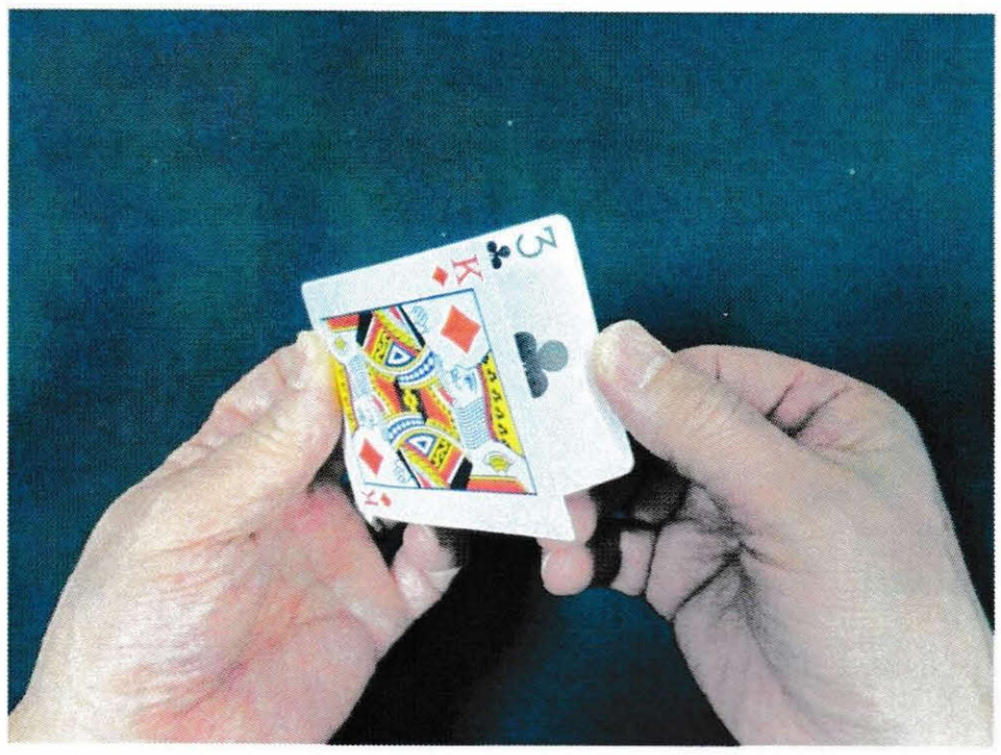


写真715

ギミック・カードは、糊で固定されていますから赤い絵札の1枚のカードのように見えます。これを、糊付けの短端を上もしくは手前にしてマジシャンの上着の右ポケットに入れておきます。裏が外側です。このほか、細字の油性のサインペンを用意して上着の内ポケットにでも入れておいてください。また、観客の誰もタリーホーの青裏のデックを持っていなかったときの保険のために、念のため、新品のタリーホーの青裏のデックを上着の左側のポケットに入れておきます。

［やり方］

①観客席に向かい、「デックを持っている人はいますか？」と訊ねます。何人かがデックをマジシャンの見えるように掲げてくれますから、その中からタリーホーの青裏を持っている客を選んでステージに上げます。サロンやプラット・ホームなら前に出てもらうだけでけっこうです。もう一人、別の客にも前に出てもらいます。

②デックを持って出てくれた客に、ケースから出してジョーカーを取り除くように言います。「ジョーカーは使いませんのでケースの中に戻してください」と続けます。客がジョーカーをケースの中に戻す間、マジシャンがデックを持っています。「それでは、あなたのデックですが、よくシャッフルしてください」と言いながら左手でデックを客に手渡し、同時に右手でケースを客から受け取って、「ケースはあとでお返しします」と言いつつマジシャンの上着の右ポケットに入れます。このとき、上着の右ポケットから右手を出してくるときにギミック・カードを糊付けしたほうが手首側になるようにしてパームして来ます。「よくシャッフルしましたか？」と言いながら左手でデックを受け取り、右手を上から添えてパームしているカードをデックの上に加えながら、ただちにデックを表向きにします。以上の動作は左右の手の連動した動きと滑らかな動作が肝要です。

②「この中から予言に使うカードを選びます」と言って、クラブの3を探します。見つけたら、二人の客から見えないようにして、デックのボトムに置いて、表をマジシャンのほうを向くように左手に横向きに持ちます。そして、このクラブの3の表に、サインペンを取りだして、横向きに、「あなたの選んだカードはクラブの3です」と書きます（写真716）。

写真716

③サインペンは戻します。このカードを、表を見せないように裏向きで、デックを借りなかった客に

渡し、「これは予言ですから、表を見ないで、このまま、私が、『出してください』と言うまでポケットに入れておいてください」と頼みます。この客が女性ならポケットのない可能性がありますから、その場合は、裏向きのまま上下に両手で挟んで持っていてもらいます。

④デックを借りた観客に、「もう予言は書きました。これから、あなたに1枚のカードを選んでもらいますが緊張しなくてもいいですよ、これはあなたがシャッフルしたあなたのデックですから」と言います。そしてこう言いながらデックを何気なくカットしてギミック・カードをデックの中央に持って来ます。左手にデックを立てて持ちます。右手で、デックの上側の短端をリフルしながら、「こうしてカードを弾いて行きますから、ストップと声をかけてください」と言います（写真717）。

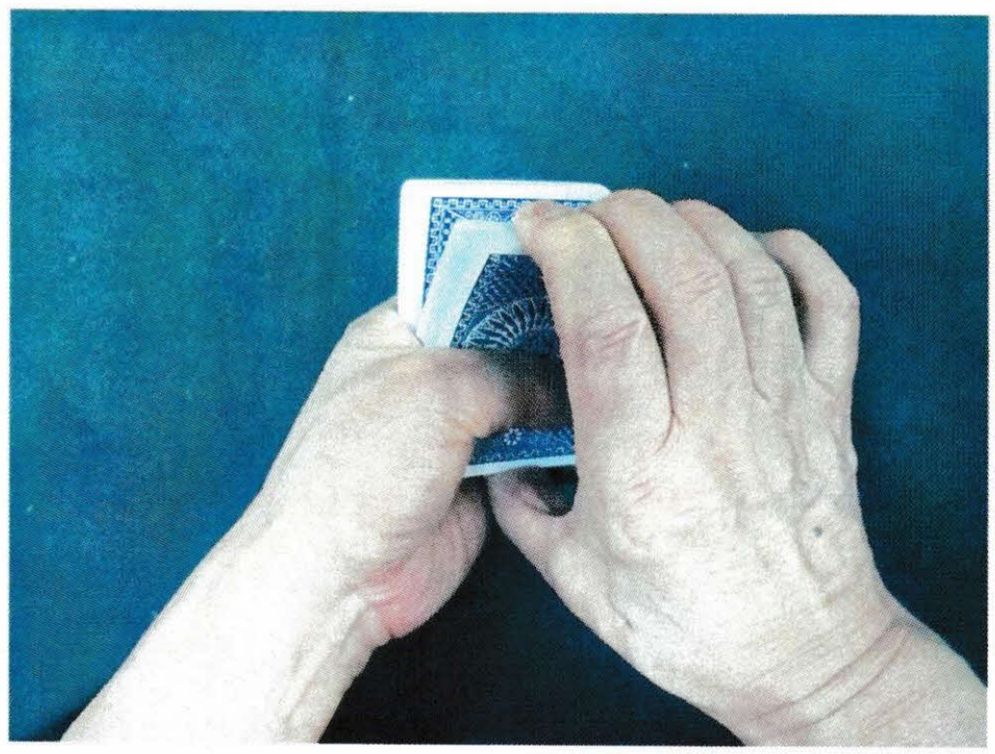


写真717

⑤ここで大事なことは、単に「ストップをかけてください」と言うことです。「どこでもお好きなところで」と言う必要はありません。なぜなら、デックが相手のデックであることを強調してあること、しかもそのデックを観客自身がすでにシャッフルしているからです。ゆっくりリフルして行き、客が「ストップ！」と言ったら一気にショート・カードまでリフルします。動きはギミック・カードのショート・カードの赤い絵札を弾いて止まり、そこにはクラブの3があります。デックを少し開いて客にクラブの3を覚えてもらいます。客が覚えたと言ったら、ただちに残りのカードをリリースしてデックを最後までリフルします。「いま、覚えたカードを忘れないでくださいね」と言います。

⑥デックを裏向きにしたまま左手に持ちます。「それでは予言を見る前に覚えたカードをお伺いします。覚えたカードは何でしたか？」客はクラブの3と答えます。そこで、予言カードを持っているもう一人の客に向かって、「それでは、その予言のカードを誰にも見せないように取りだして、カードの表に書いてある予言の言葉を大きな声で読み上げてください」と言います。客が、「あなたの選んだカードはクラブの3です」と読み上げます。予言カードはそのまま裏向きで持っていてもらいます。これで予言は当たりました。

⑦そこで、デックを横方向に表向きにして左手に持ちます。これはギミック・カードの糊の側がマジシャンの方に来るようにするためです。この客は、この段階では予言が当たったと思っているだけです。「それでは、これから1枚ずつ、カードを表向きにして行きますから、右掌を出してください。そしてさきほど覚えたクラブの3が出て来たらストップと言ってください」と言いながら、

客に右掌を出させ、その上に表向きのデックから1枚ずつ配って行きます。ギミック・カードの赤い絵札が出て来たら、裏にくっついているクラブの3と一緒に配ります（写真718：客の掌は省略してあります）。最後まで配っても覚えたはずのクラブの3は出てきません。「クラブの3でしたよね？ありませんでしたか？」と念を押します。客は「なかった」と答えます。「ないはずですよ。それではさきほどの予言のカードを見せてあげてください」ともう一人の客に促します。もう一人の客が予言のカードの表を見せると、それがクラブの3です。

写真718

⑧この間に、マジシャンは、客の掌から表向きのデックを取り上げてそろえ、横向きにひっくり返して裏向きにし、手前の短端をリフルして糊付けされた厚い2枚のギミック・カードのところでカットとします。結果としてギミック・カードはデックのトップに来ます。デックをそろえて左手でデックを借りた客に手渡す動作で、右手はトップのギミック・カードをパームして上着の右ポケットに入れ、ギミック・カードをポケットに置いて、カード・ケースを出して来ます。ケースを、借りた客に渡しながら、空いた右手でもうひとりの客から予言カードのクラブの3を受け取ります。

⑨この予言の書かれたクラブの3を、デックを借りた客に渡したら、「でも、これでは、もう52枚のデック全体が元通りに使えませんよね？」と言って、上着の左ポケットから新品のデックを取り出して、「これもお持ち帰りください」と言ってお土産に渡します。

[コメント]

アンネマンの現案と異なるところがいくつかあります。

①アンネマンのギミック・カードは、クラブの3がショート・カードになっています。それは、アンネマンがデックをトップ側からリフルするからです。最後に表向きに点検するときにショート・カードが見えなくて有利です。ただし、客が覚えるために凝視するクラブの3がショート・カードなのは欠点です。

②ギミック・カードの加え方や処理の仕方はまったく書いてありませんでしたので、私がケースを使うようにアレンジしました。もうひとつのやり方はサインペンの出し入れの機会を使うこともできますが、その場合は、サインペンを、ポケットにしまう最後の瞬間までテーブルの上にでも置

いておかねばなりません。

③途中でお気付きの方もおられると思いますが、実は、ギミック・カードは必要ではありません。デュプリケイトのクラブの3が1枚あれば、この手品はできてしまいます。デュプリケイトのクラブの3をひそかにパームして客のデックに加え、このカードを、デックを借りた客にフォースします。フォースしたあとは、このデュプリケイトをボトムから2枚目にコントロールしておきます。デックをひっくり返して表向きに一枚ずつ配るとき、最初の1枚をボトム・カードとその下のデュプリケイトとの2枚をあたかも1枚のようにダブル・リフトして一緒に配ります。そして、その上に次々と配って行きます。クラブの3は見えません。点検し終わったデックをそのまま持ち上げて裏向きにするとデックのトップ・カードはデュプリケイトのクラブの3ですから、これをパームして処理すればオシマイです。アンネマンが、なぜそのようにしなかったのかはわかりません。フォースとか、コントロールとか、ダブル・リフトとか余計な技法を使いたくなかったのかもしれません。その割には平気でパームを使うのは1930年代という時代かもしれません。

④この作品の最大の利点は、客のデックを借りて、しかも最初にシャッフルさせる点です。アンネマンの時代は、たぶんそれが常識だったのだと思います。

⑤最後に、お土産の新しいデックを渡すのは私が勝手に付け加えました。

2. Ken Krenzel の"The Left Hand Only"

この手品は Karl Fulves の刊行していた"Epilogue"という奇術専門誌の"Ken Krenzel Issue"(1975年)に収載されています(写真729)。Max Maven は自分の嗜好に合わない、と言っていましたが、やってみるとなかなかいい手品です。カード・マジックを片手で演じるという発想がユニークで、Max Maven は、その演出を採用したことになります。

[現象]

マジシャンは、今日は片手でカード・マジックをやってみるという振れ込みで、右手をズボンの右ポケットに入れます。デックを左手だけで持って、まず、客にデックをよくシャッフルしてもらいます。再びデックを左手で受け取って、客にピークで1枚のカードを選んでもらいます。この間、右手はずっとズボンの右ポケットに入れたままです。カードを選んでもらったら、そのまま左手をマジシャンの背後に持って行きます。「片手だけであなたのカードを探すのはなかなか難しいのです」と言って、カードが見つからなかった様子で、左手を再び前に出して、デックを客に渡します。「やっぱり簡単には見つかりませんでしたのでやり方を変えます。すいませんが、さきほど覚えたカードを探して私の掌の上に置いてください」と左掌を差し出します。客がデックの中から自分のカードを探しますがありません。デックは客の手にあるままです。「変ですね。覚えたカードは何だったのですか？」と言って客の答えを聞きながらズボンの右ポケットから右手を出すと、その指先にはまさしく客の覚えたカードが挟まれています。

[準備]

上着を着用している必要があります。デックは、もちろんマジシャンのデックでできますし、観客

から借りたデックでもできます。演出は現案とは異なり、ややアレンジしてあります。

［やり方］

①デックを左手に持ち、「今日は、片手だけでカード・マジックをやってみたいと思います。使うのは左手だけで、利き腕の右手は、ポケットに入れたままにしておきます」と言います。そして、右手をズボンの右ポケットに入れますが、これは、完全に入れてしまわないで、右手指をポケットの入り口で折って入れます（写真719）。これを観客側から見ると、あたかも右手をポケットの中に入れたかのように見えます（写真720）。

写真719

写真720

②左手のデックを客に渡します。「それでは、このトランプをよく切り混ぜてください」。客がシャッフルします。客にシャッフルさせることは重要です。カードに仕掛けがないと思わせるばかりか、特定のカードを客に強制するのではないということも暗黙のうちに伝えることになるからです。もちろん、そのようなことを説明する必要はありません。客が十分にシャッフルしたら、デックを再びマジシャンの左手で裏向きに受け取ります。片手しか使えませんので次の動きに必要な状態で客から受け取らねばなりません。デックを裏向きで受け取ったら、左親指で、デック全体

をやや右に押して、右長端が右へ斜めに傾くようにします。ちょうど手前側からデックの短端を見ると形が平行四辺形になるようにします。これは次のピークの準備です（写真721）。

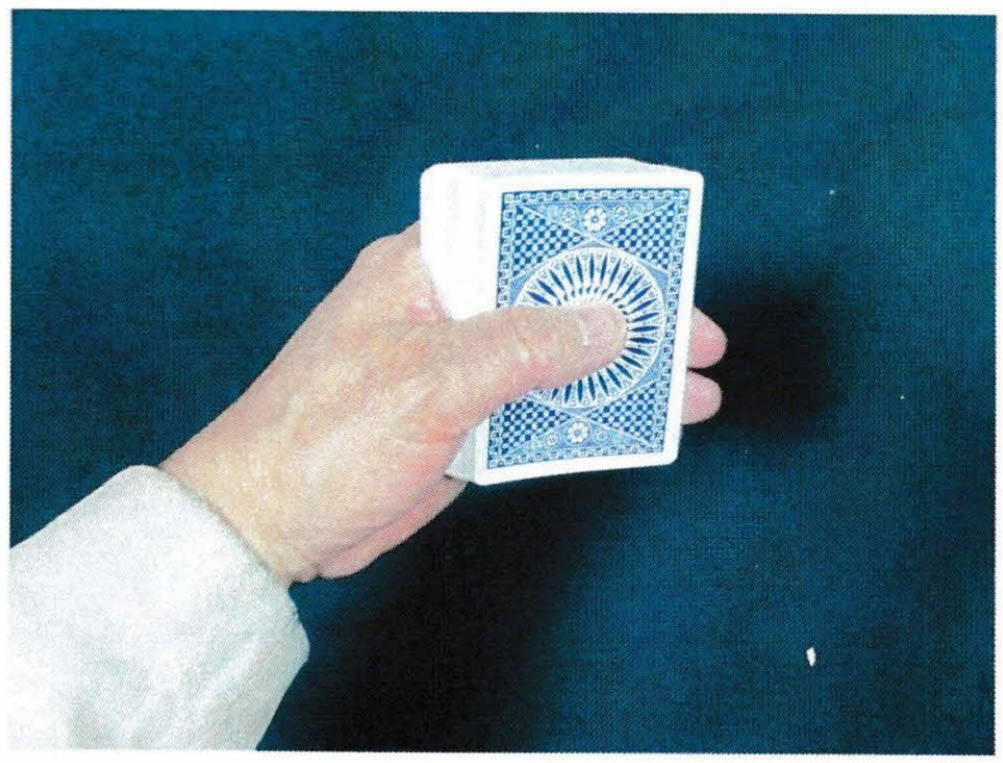


写真721

③このままデックの表が客のほうを向くようにして左手でデックを立てて、客に左親指でデックの右長端の任意の場所を押してデックを分け、そこに見えたカードを覚えてくれるように言います。これが「ピーク」です。客が親指でデックを分けたら、デックの下のほうにも割れ目ができますから、そこに左中指と薬指でブレイクを作って保持しておきます（写真722）。客がカードを覚えたら客の親指は放してもらいます。

写真722

④左手を下げます。ブレイクは左中指と薬指で保持したままですが、デックが平行四辺形に傾いているため、ブレイクは客からは見えません。「これから、左手だけであなたのカードを探してみますが、ちょっと見えないところで行ないます」と左手をマジシャンの背後に回します。回したら、ただちにデックのトップを背中に押し付けて固定し、ブレイクの箇所に中指と薬指を入れて、爪と指の摩擦を利用して客の覚えたカードを右横へ半分ほど引っ張り出します（写真723）。引っ張り出しながら、このカードをデックの長端の横側に沿ってトップへと下から押し上げながら滑らして表向きにひっくり返します（写真724）。やってみると簡単です。

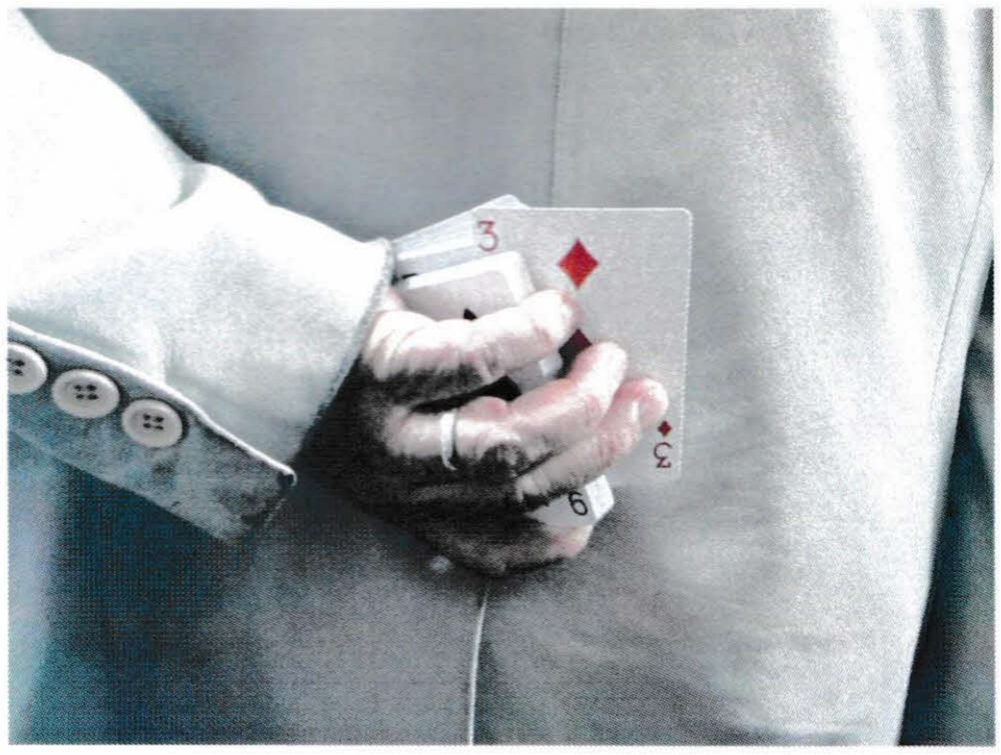


写真723

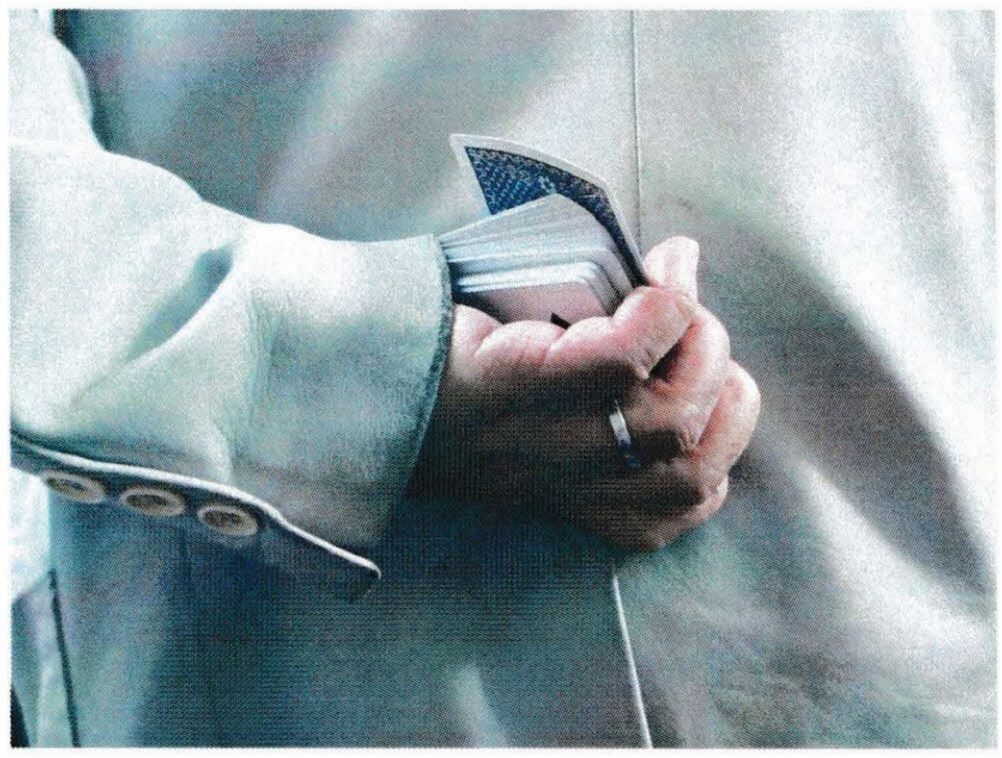


写真724

⑤客のカードがトップにひっくり返ったら、左手をさらに右へ伸ばして、上着の下から右手にこのカードを渡します（写真725：上着は脱いであります）。右手は、ズボンの右ポケットに入れたままですが、指は折り曲げてありますから、そこに客のカードの短端を挟むように渡します。

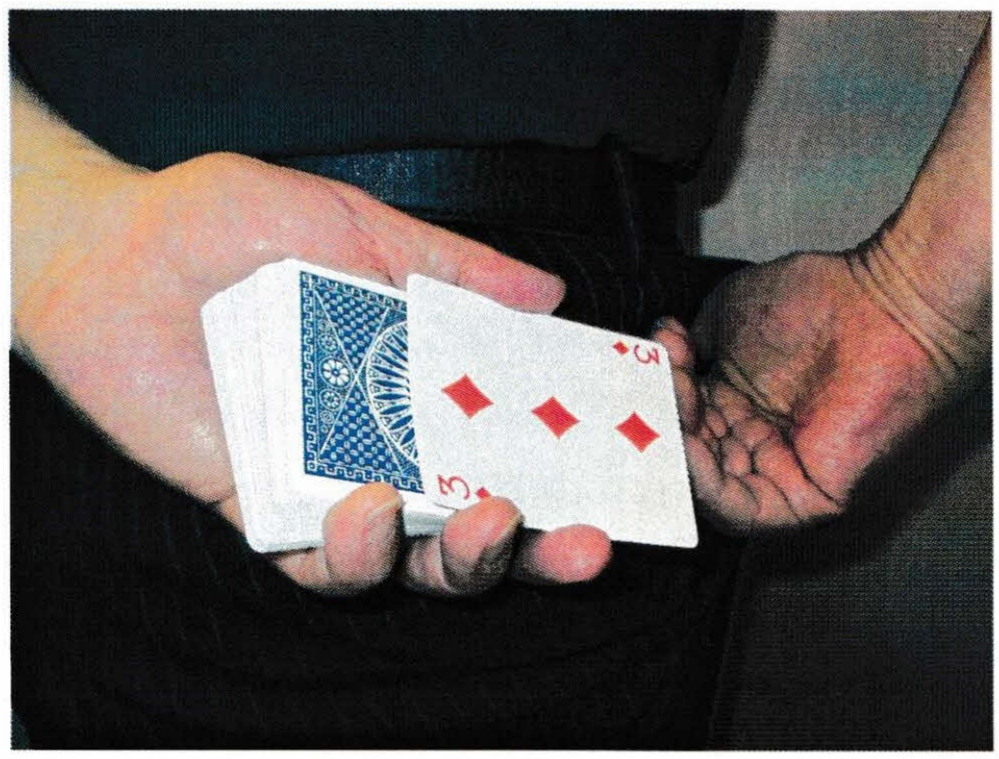


写真725

⑥左手を、デックを持ったまま前に出します。「どうもやはり片手では難しいみたいです」と言って、デックを客に手渡します。「別の方法で当てますから、すいませんが覚えたカードを探して、私の左手の上に置いてください」と言って左手を差し出します。この間に、右手は、カードを完全にズボンの右ポケットに入れてしまいます。

⑦客は自分のカードがないと言いますから、「確かですか？覚えたカードは何でしたか？」と尋ねます。客がカードの名前を言ったら、「あー、私は片手であなたのカードを探すと言いましたね？それは、こっちの手だったんです」と言って、右手でポケットから客のカードを出して表向きにします。

3. "Pocket Nightmare"

さて、"Pocket Nightmare"に戻ります。骨格は、原案者であるMax Mavenが"KAYFABE"でもペンギン・マジックの単売商品の解説でも、実際の演技とともに詳しく解説していますので、それでほとんど尽きています。ただ、日本で演じる場合は、「ピーク」も含めて、いくつかの工夫が必要です。以下にその工夫を述べます。

[やり方]

①セットされたデックを箱から出します。デックを表向きに、ポインター（クラブの7とかスペードの9）がマジシャンの方を向くようにして拡げます。するとデックは普通のデックのように見えます（写真726）。拡げながら、「普通の手品は、こんなふうにトランプを拡げて、お客さんに1枚選んで抜いてもらってから、それをもう一度中に戻したあとで当てます」と言います。ここで、客は拡げられたデックを見て、いろんなカードがあることを認識します。

写真726

②デックを閉じて、客に表側（ボトム）を向けてかつポインターと反対側（普通のインデックス側）が上になるようにして左手に持ちます。「今日は、トランプを引いて覚えてもらうことはありません。その代わりに、私がトランプ全体をこんなふうに持っていますから、お客さんの左親指でトランプの角の部分を押して、そこに見えたトランプを覚えてもらいます。このほうが引いて抜くよ

りも当てるのが難しくなります」と説明しながら、実際にマジシャンの人差指で右上隅の一箇所を開けて客に示します（写真727）。「練習のために少しやってみましょう」と言って、客に試させます。このとき、そのつど異なるカードが見えますから、そこがミソです。

写真727

③「要領がわかったと思います」ここでデックの上端を右手で持って縦向きに表向きにします。クラブの7が見えます。「ただし、いま見えているトランプは選ばないでください」と言いつつ、デックを再び左手に裏向きにしますが、今度は横向きにひっくり返します。これで、上下が反対になりました。

④「もう少し、見つけるのを難しくします。私が特別な技術を使えないように、今日は片手で行ないます」こう言って、右手をポケットに入れます。これで、準備はすべて完了です。後はペンギン・マジックの動画解説のように演じます。

4. 考察

まず最初に、"Pocket Nightmare"は間違いなく秀作です。タネも演出もよく考えてあって、商品としても秀逸です。これを商品化してくれた Penguin Magic には感謝しなくてはなりません。ハートの5以外にも作ってくれるともっと感謝します。"KAYFABE"の解説のときはタネのカードの枚数は15枚程度でしたが、商品化されたものには35枚近く入っています。たぶん、商品化するときに、フォースできない可能性をできるだけ排除するために枚数を多くしたのだと思います。実際、35枚くらいあれば、客はほとんどハートの5を選んでくれます。Max Maven は40年前に考案したとき、タネのカードを作るのがたいへんだったから15枚程度にしたと言っていました。それは本当だと思います。タネのカードの枚数の少なさを技術でカバーしていたと言っても過言ではないでしょう。また、ハートの5が選ばれなかったときの対処方法をMax Mavenはかなり詳しく述べていますが、それはまあ、想定される質問に対して予め答えているだけで、要するにそのときは臨機応変にやるしかありません。

大事なことがあります。私が Max Maven の演技を最初に見たときに、不思議だけれど妙な違和感があり、これは、デック全体がディバイディッド・カードから構成されているのではないかと推

理したのは、彼が演技の冒頭にデックをシャッフルしなかったからです。普通の人はそんな特殊なギャフ・カードの存在を知らないので大丈夫だと思われるかもしれませんが、デックそのものが何か仕掛けのある特別なデックなのだろうと思われることは同じです。結果としてデックは一部がディバイディッド・カードですから、客の疑いは半ば正解です。ただ、35枚はタネのカードですが、言い換えれば15枚は普通のカードですので、この部分でオーバー・ハンド・シャッフルなどを行なおうと思えば行なえるのです。ただし、上の解説ではポインター・カードの位置のこともあり、あえてシャッフルはしておりません。

最後に、"JINX"の原文を写真728に、"Epilogue"の原文を写真729に示します。これで全文です。実にたったこれだけしか書いてないのです。

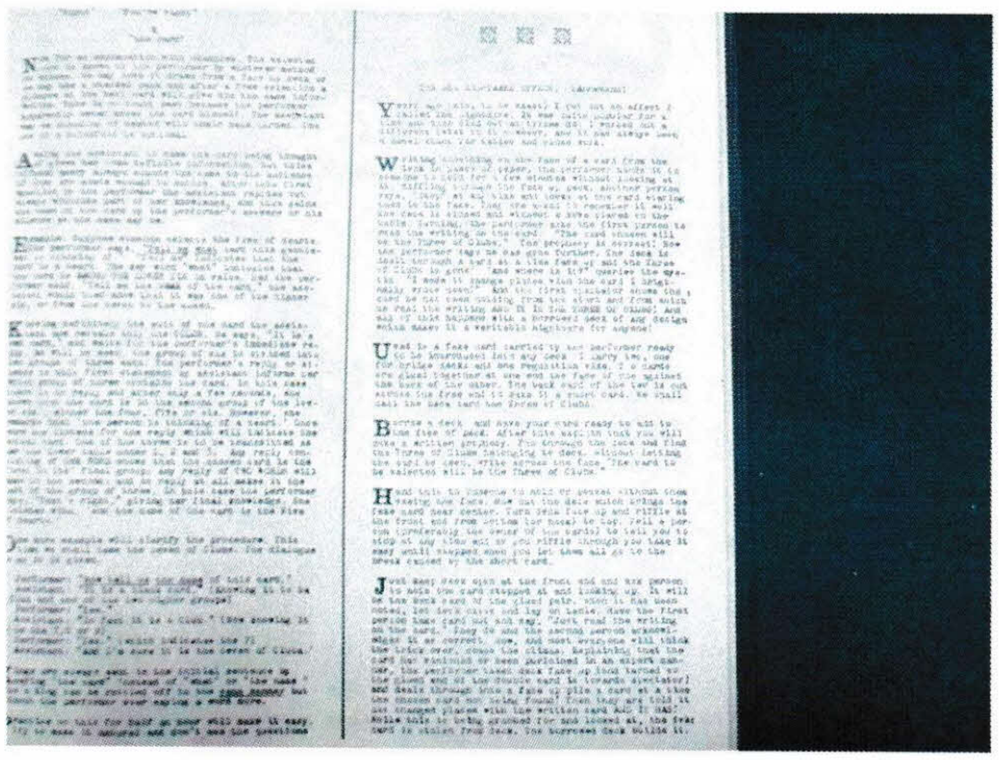
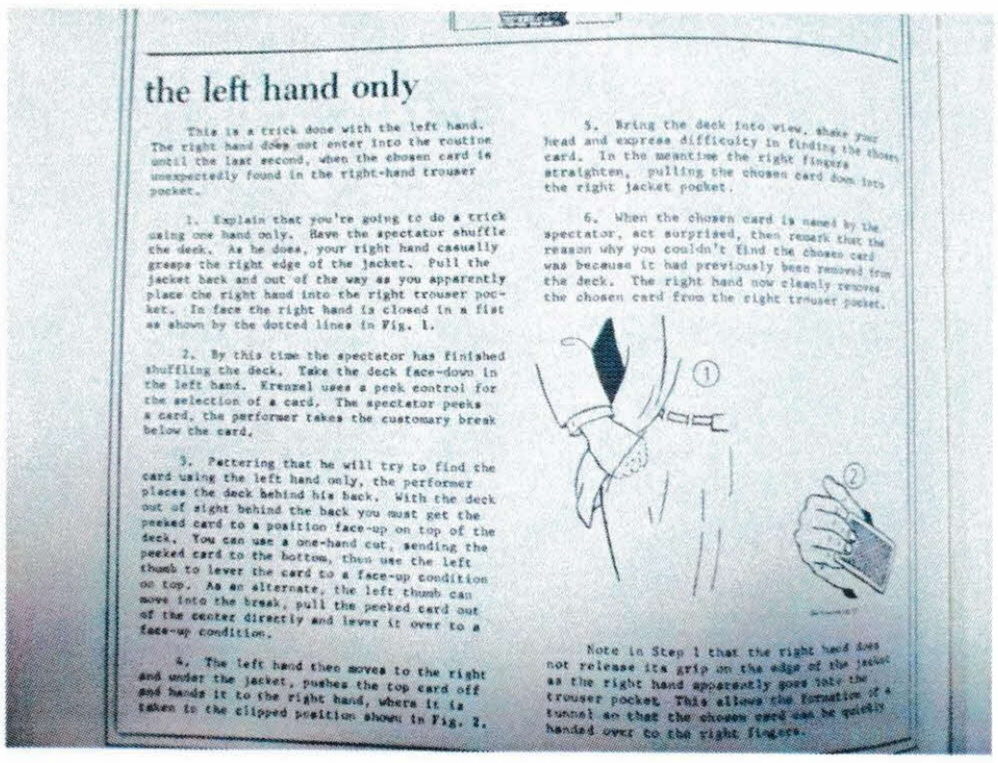


写真728



the left hand only

This is a trick done with the left hand. The right hand does not enter into the routine until the last second, when the chosen card is unexpectedly found in the right-hand trouser pocket.

1. Explain that you're going to do a trick using one hand only. Have the spectator shuffle the deck. As he does, your right hand casually grasps the right edge of the jacket. Pull the jacket back and out of the way as you apparently place the right hand into the right trouser pocket. In fact the right hand is closed in a fist as shown by the dotted lines in Fig. 1.

2. By this time the spectator has finished shuffling the deck. Take the deck face-down in the left hand. Krenzel uses a peek control for the selection of a card. The spectator peeks a card, the performer takes the customary break below the card.

3. Pattering that he will try to find the card using the left hand only, the performer places the deck behind his back. With the deck out of sight behind the back you must get the peeked card to a position face-up on top of the deck. You can use a one-hand cut, sending the peeked card to the bottom, then use the left thumb to lever the card to a face-up condition on top. As an alternate, the left thumb can move into the break, pull the peeked card out of the center directly and lever it over to a face-up condition.

4. The left hand then moves to the right and under the jacket, pushes the top card off and hands it to the right hand, where it is taken to the clipped position shown in Fig. 2.

5. Bring the deck into view, shake your head and express difficulty in finding the chosen card. In the meantime the right fingers straighten, pulling the chosen card down into the right jacket pocket.

6. When the chosen card is named by the spectator, act surprised, then remark that the reason why you couldn't find the chosen card was because it had previously been removed from the deck. The right hand now cleanly removes the chosen card from the right trouser pocket.

Note in Step 1 that the right hand does not release its grip on the edge of the jacket as the right hand apparently goes into the trouser pocket. This allows the formation of a tunnel so that the chosen card can be quickly handed over to the right fingers.

写真729

これは、aficionado の Vol.5-No.2 です。
郵便の送付先：〒145－0061　東京都大田区石川町2－33－1－904　マスカレイド
E メール・アドレス：masqpart4@aol.com
これは、限定100部のうちの09／100です。　（2020年4月）